

マイクロフィッシュ 応用システム

近年、マイクロフィルム技術の発達によって、膨大な量の文書や図面の保存管理、あるいは輸送などが非常に容易になり、更にCOM(コンピュータアウトプット マイクロフィルミング)が開発され、コンピュータ出力の情報を直接マイクロフィルム化できるようになって、多方面の利用が進んでいる。しかし、マイクロ化には管理、更新、検索などに手間がかかるという問題点が残されていた。

日立製作所は、これらの不便を克服するために、マイクロフィッシュ自動検索機を開発し、文書、資料、図面、写真などのイメージ情報をマイクロフィッシュに収め、これをファイル化して短時間に検索、ディスプレイが可能で有効活用の道を開いた。

マイクロフィッシュはマイクロフィルムの一形態で、1シートに5×12枚のマイクロフィルムを並べたもので、取扱いが容易なため、システム化に適している。

そして、このマイクロフィッシュ検索機とコンピュータが有機的に結合されているため、図面、漢字などを含んだ大量の情報を「イメージ情報」プラス「文字・数字情報」という理想的な形で蓄積することができ、検索の指示はタイプライタとの会話により、わずか4秒で目的の情報が自動的にディスプレイされるのである。

このマイクロフィッシュを応用した情報検索システムを“HIPACS”と呼んでいる。

図は、日立製作所多賀工場における、“HIPACS”システムの導入例である。導入の目的は、設計部門の情報管理の合理化である。

システムは、三つのブロックに分けられる。(1)データ加工処理、編集システム(2)マイクロフィルム作成システム(3)ファイルされた情報を活用するシステム。

各ブロックの機能は、次のとおりである。(1)図面と生産情報をフィッシュ化する指示を出すと同時に、情報のアドレスを計算する。(2)マイクロフィッシュを作成する。(3)端末からの問合せに対し、コンピュータでアドレスを端末に送信する。端末では図面及び生産

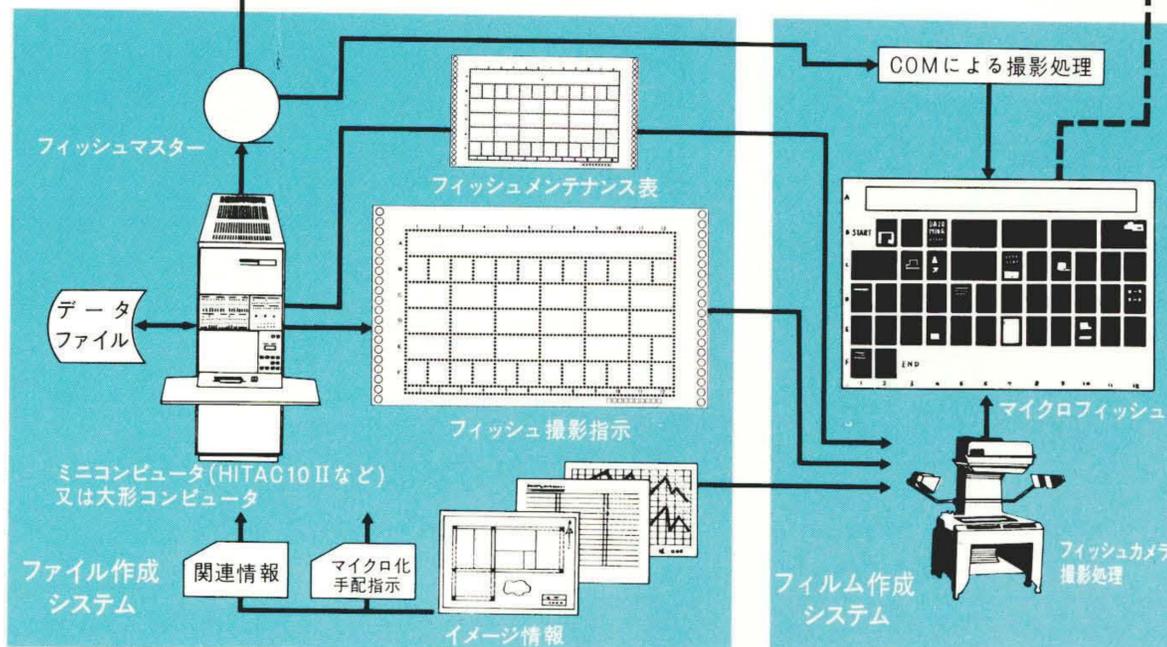
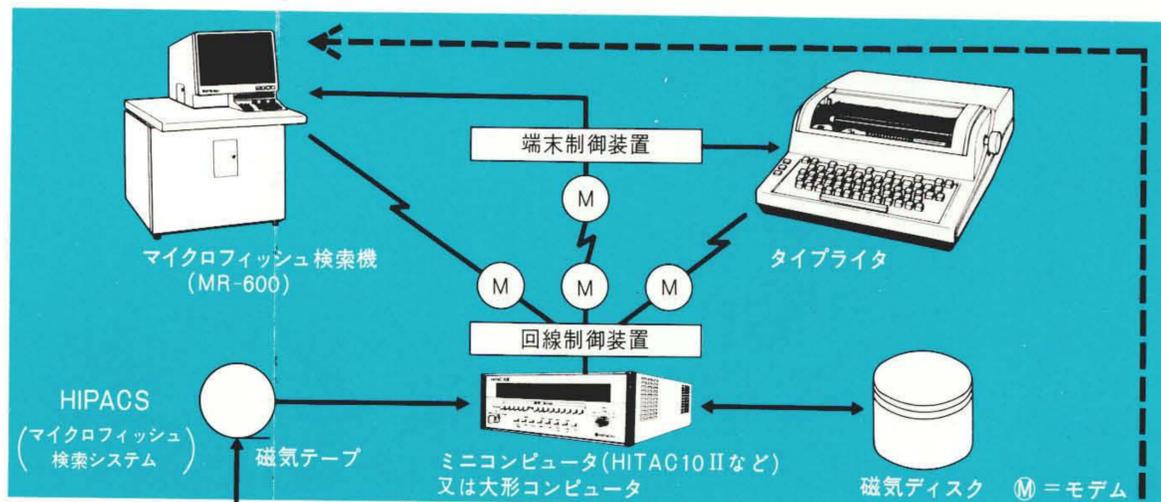


情報を表示する。

“HIPACS”は、コンピュータ出力情報を取り扱いやすいものにするとともに、コンピュータで直接処理することが難しい設計図などの情報を簡単に取扱いできるようになることや、取扱い可能な情報量の増加と、検索時間の短縮

が実現できるなど、数々の特色がある。

マイクロフィッシュ情報といえば、従来、資料の縮尺写真と解釈される場合が多かったが、もっと身近な情報やデータのすべてに適合するものであり、今後“HIPACS”は、広く各方面に発展することが期待できる。



システムの概要